

ペットは家族とみなせるか (2) —飼育経験の有無が与える影響—

Can Pets Be Regarded as Family? (2):
—The impact from experiences of raising an animal—

松田光恵^{*}
Mitsue MATSUDA

Abstract

This study explored the impact that having or not having had the experience of raising an animal has on views of family. A co-occurrence network analysis was applied to responses obtained from free-writing analysis, revealing the characteristics of the impact of such experiences. The results showed that for “the scope of who is perceived as a family member,” those who have not had the experience of raising an animal envision a traditional family bound by blood relations, while those with such an experience tended to understand living beings that live together and who are treated with affection as a family. This result was interesting in that one can view a family as beginning with individuals who are centered on themselves or as starting from the “what is around” of the individual. The fact that a pet as a medium exists within a family is predicted to generate positive effects emotionally as well, such as compassion and being considerate toward others.

A lifestyle appropriate for pets will strengthen the bonds between family members, heightening communication effects. Modern families can be characterized as needing to develop familial relationships, using pets as a medium and a means of recapturing family as a family-like existence. Pets, as secondary family members, provide us with a sufficiently beneficial effect.

キーワード：家族観、主観的家族、ペット、ペット飼育、コンパニオン・アニマル、ヒューマン・アニマル・ボンド、テキストマイニング

問題

家族間への影響

ペットを飼うことにより、私たちはどのような影響を受けているのだろうか。若島 (2011) は、家族関係に及ぼす犬の影響について調べ、愛犬を迎え入れることによりどのように家族関係が変化するかについて調査した。その研究によると、愛犬を家族に招き入れることにより、家族内のコミュニケーションや各成員間の交流頻度が増加し、家族の結びつき、特に親子間の結びつきが強くなることが明らかになった。また、子どもが愛犬と関わることで責任感や家族成員との活発な交流が増え、その結果、家族内での子どもの影響力を高めていることを明らかにした。さらに、家族の各関係性が愛犬を飼育した時期から変化している群を質的に分析し、①住居地域は住宅地で一軒家、室内犬、②愛犬数1匹、③犬種は比較的飼いやすいとされている犬種、④愛犬として初めての犬である、⑤飼育選択者と主飼育者が同一人物である、ことを見出した。これらのことから、愛犬を媒介として家族間の交流が盛んになり、さらに初めての愛犬を飼育した場合、家族関係の変化が顕著であったと考えられる。愛犬を飼って良かったこととして、①心理的安定、②家族内コミュニケーションの促進、③生活の質の向上、④飼育者自身の心身への肯定的影響の4点が、愛犬を飼って困っていることとして、①行動の制限、②しつけに関する悩み、③室内飼育の悩み、④死別・将来の不安、⑤出費、⑥犬の病気、⑦散歩の手間、⑧餌の問題、⑨人間へ

* くらしき作陽大学子ども教育学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

のアレルギー、の9点がKJ法によって分類された。このように、愛犬を家庭に迎え入れることは、愛犬を含んだ家族間の結びつきを強くし、精神面、生活面で肯定的な影響を人間に与えるということである。しかし同時に、犬の特性を理解せず飼育すると様々なトラブルに見舞われることにもなる。

飼育者の心理的影響（飼育経験の有無による検討）

金子・村上（2003）は、飼育経験の有無によって飼い主がどのような心理的効果を得られるのかを検討した。ペットの飼育経験者ではペットは家族の一員で心が通じ合えると認識されており、家族間でのコミュニケーションが良好になることも分かった。ペットには癒しの効果があり、ペットを相手に語りかけることでカタルシス効果が得られるとした。さらにペットは無条件に飼い主を受け入れてくれ、自己の存在価値を高めるものとし、非飼育経験者に比べ飼育経験者は孤独感が低いことも明らかになった。このようにペット飼育経験を有することで、我々の情緒面に肯定的な影響を働きかけるが分かっている。

また近年の研究では、ペットと暮らすことでオキシトシンが活発に分泌されることが分かっている（ペットフード協会, 2014）。オキシトシンとは、別名幸せホルモンとも呼ばれており、人間が幸せだと感じる時に、脳内から分泌されるホルモンのことである。適切な躰をし、飼い主との良好な関係を保っているペットとは、安心・信頼といった感情を引き起こし、人間とペットが触れ合うことで、両者にオキシトシンの分泌が増えることが知られている。

このように家庭の中にペットが存在するということは、様々な制約や困難を発生させる一方で、それをも凌駕するポジティブな影響や、家族間のコミュニケーションに変化を与え、親和的な交流が生まれているのである。

目的

前著では、「家族とみなす際には、一つ屋根の下に暮らし、空間を共有し、生活を共にしていることが重要である。そして愛情を持ち、情緒的なつながりをもてる大切な存在が家族であると意識されていた。まさに“ペット”とは、その存在になりうる対象なのである。ペットとは同じ空間を過ごし、精神的な絆を満たしてくれるまさに家族そのものと感じられる」（松田, 2016）とした。そして我々人間にとってペットとは、心理的家族の役割を果たしていることを指摘した。

本研究は、前著「ペットは家族とみなせるか（1）—家族概念と主観的家族についての検討—」（松田, 2016）に続き、飼育経験の有無が家族観に与える影響を探るものである。

方法

前著において大学生を対象に家族観とペットと家族の関係について、質問紙調査を行った（松田, 2016）。本著では、Q26「どの範囲を家族とみなすか」、Q28「なぜ家族とみなすのか」の自由記述2項目について、ペットの飼育経験の有無の観点から詳細に分析した。1. 飼育経験有（現在・同居）、2. 飼育経験無、3. 飼育経験有（過去）、4. 飼育経験有（現在・別居）の4つに分け、飼育経験の有無による影響、の4つに分け、ネットワーク分析を行った。また、Q29からQ44の16項目、概念C「ペットを家族とみなすことについての意識」について、飼育経験の有無による影響を検討するため「ペット家族の意識」として再度因子分析をおこなった。ペット飼育経験有り（ペットを飼っている（同居）、実家で飼っている（別居）、飼っていた経験が過去にある）無し（飼ったことがない）に分け、その差異を検討した。なお、調査協力者、調査期間、調査内容及び質問項目については紙面の都合上省略するが、松田（2016）を参考にされたい。

結果

「ペット飼育経験の有無」の結果

フェイスシートF 4 において、ペットの飼育経験の有無をたずねた。回答者256のうち、回答に不

備のあった2名を除き、分析対象は254名である。選択項目は、現在飼育している（同居）（83人）、実家で飼っている（別居）（44人）、過去において飼育経験はあるが現在は飼っていない（49人）、飼った経験がない（78人）、その他（0人）の5項目であり、その結果を図1に示す。

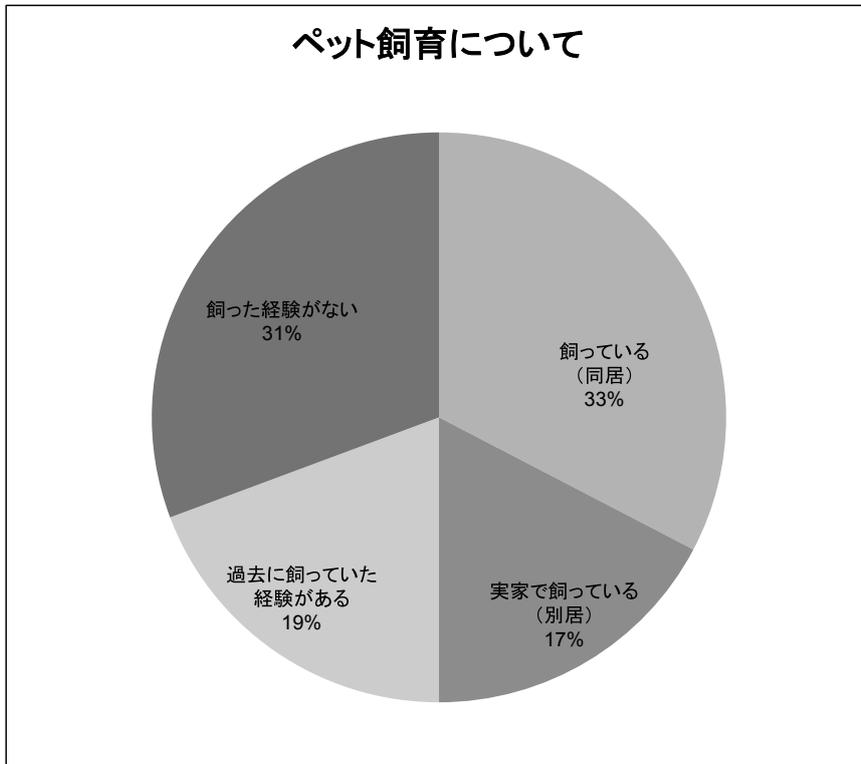


図1 ペット飼育経験の有無

ペットとの同居別居を含め現在ペットを飼育している者は全体の50%、過去において飼育した経験をもつ人を含めると約70%の人がペットの飼育経験を有していた。内閣府が実施している「動物愛護に関する世論調査」では、2003年ペットの飼育率は36.6%、2010年では34.3%と推移しているのに比べ、比較的高い結果となった（内閣府、2003・2010）。

自由記述の共起ネットワーク分析の結果

自由記述、Q26「あなたはどの範囲の人々（モノ・生き物・ペット etc）を家族とみなしますか」、Q28「Q26 で書いたその人々（モノ・生き物・ペット etc）をなぜ家族とみなすのですか」に関し、フリーソフトウェアKH Coder^{注1)}にて形態素解析を行った。

Q26、Q28の頻出語を用い、どの範囲までを家族とみなすか、また何故そう思うのか、についてデータマイニングの手法を用い、テキストマイニングを行った（Q26、Q28頻出語の結果は松田（2016）に記す）。その際外部変数として1. 飼育経験有（現在・同居）、2. 飼育経験無、3. 飼育経験有（過去）、4. 飼育経験有（現在・別居）の4つに分け、飼育経験の有無による影響、同居や別居の場合も視野に入れ検討した。分類の4. 飼育経験有（現在・別居）は、実家などで飼育しており、現在別居であることを表している。Q26、Q28自由記述に特徴的な語の抽出を行い、構造的な特徴を探るため共起ネットワーク分析を行い、その特徴語同士の共起関係を明らかにした。

KH Coderの共起ネットワーク分析では、テキストデータ内で、ある語と他の語が一緒に出現することを共起と呼び、共起する語を線で結んだものを共起ネットワークという。ここでは出現パターンの似通った語、共起の程度が強い語を線で結んだ共起ネットワーク図を描画することができる（田中、2013）。自由記述で用いられていた言葉の、出現パターンの似通ったもの、すなわち共起関係にある

ものが線で結ばれる。共起ネットワークでは中心性得点が算出され、その結果、中心性に基づき語の出現頻度や語と語の結びつきの程度に応じ、円や線によって描画される。円の大きさは単語の出現数が多い語ほど大きく、フォントも大きく表示される。また共起の程度が強いほど太い線で描画されている。ただし、円同士の距離は意味をもたない。

Q26：飼育経験有無4分類全体の結果

図2はQ26の回答を飼育経験有無の4つに分類し、共起ネットワーク分析をした結果である（出現回数2回以上）。

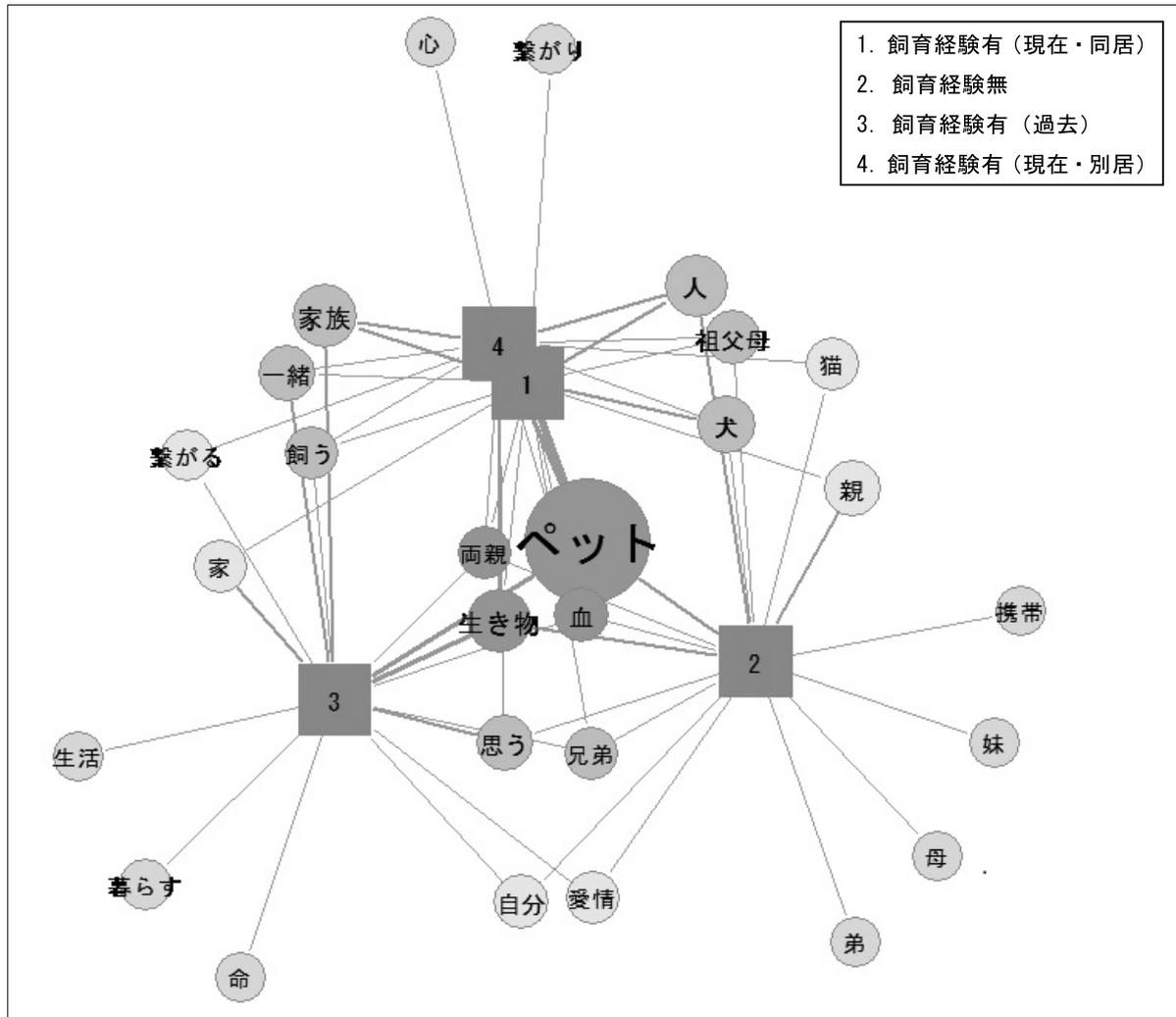


図2 4分類別でみた「家族とみなす範囲」頻出語の共起ネットワーク分析

図2の結果から、1. 飼育経験有（現在・同居）と4. 飼育経験有（現在・別居）は「ペット」「生き物」などに太い線が描かれ、共起の程度が強いことを意味している。ペットと同居や別居にかかわらず、家族とみなす範囲は似ている。また、2. 飼育経験無に関しては、「親」「人」「血」などの語を特徴とする記述をしていることが分かる。3. 飼育経験有（過去）と回答した者はペットや生き物を含み、「家族」「一緒」など比較的抽象的な概念で家族範囲を表す傾向にあった。

Q26：飼育経験有（現在・同居）の結果

次に4分類それぞれに関して家族とみなす範囲をどのような特徴語で表現しているのか分析する。図3はQ26の回答で1. 飼育経験有（現在・同居）、と回答した共起ネットワーク分析:サブグラフ（媒介）の結果である（出現回数2回以上）。サブグラフ分析では、比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって表している（田中、2013）。背景が白・囲み罫黒の語は、グループを形成しない単独の語を表している。同じサブグラフに属するものは実践で結ばれ、互いに異なるグループに属するものは破線で表される。この分析からは4つのサブグループに分かれることが分かった。

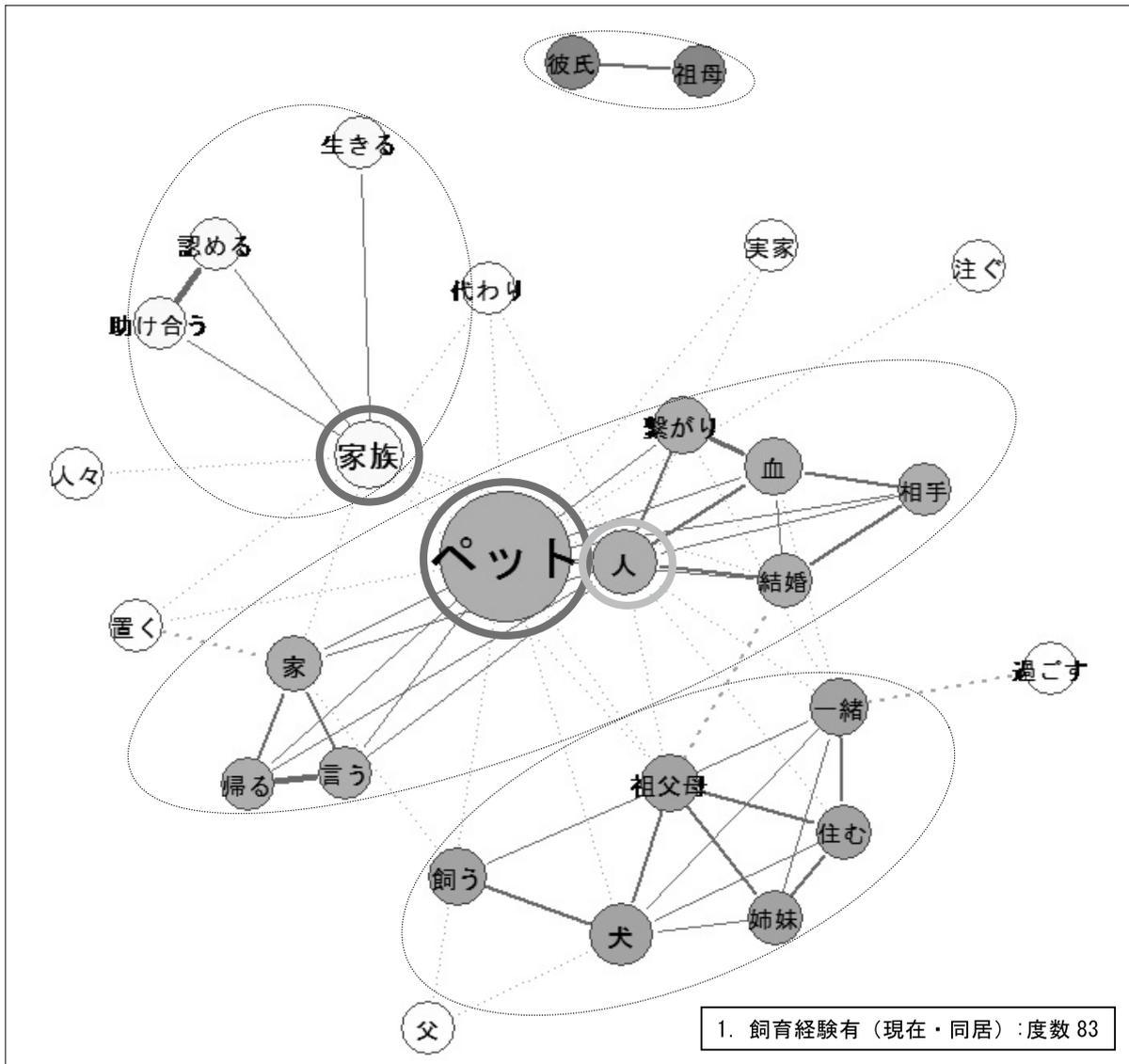


図3 飼育経験有（現在・同居）が「家族とみなす範囲」の共起ネットワーク分析

図3で赤い丸で囲まれた文字「ペット」「家族」「人」が中心性の高い語である。図中の淡赤丸、濃赤丸の順で中心性が高くなっている。つまり「ペット」「家族」「人」が語と語の繋がりの中で中心であり影響力が強いといえる（以下本文図中の赤丸囲み同様）。家族は認め合い助け合う、ペットや結婚で繋がった人、などの記述がみられる。なお、図中のグループごとに囲んだ楕円破線と中心性を表す赤丸印は筆者が図中に加筆したものである。

Q26：飼育経験有（過去）の結果

図5はQ26の回答で3. 飼育経験有（過去）、と回答した共起ネットワーク分析の結果である（出現回数2回以上）

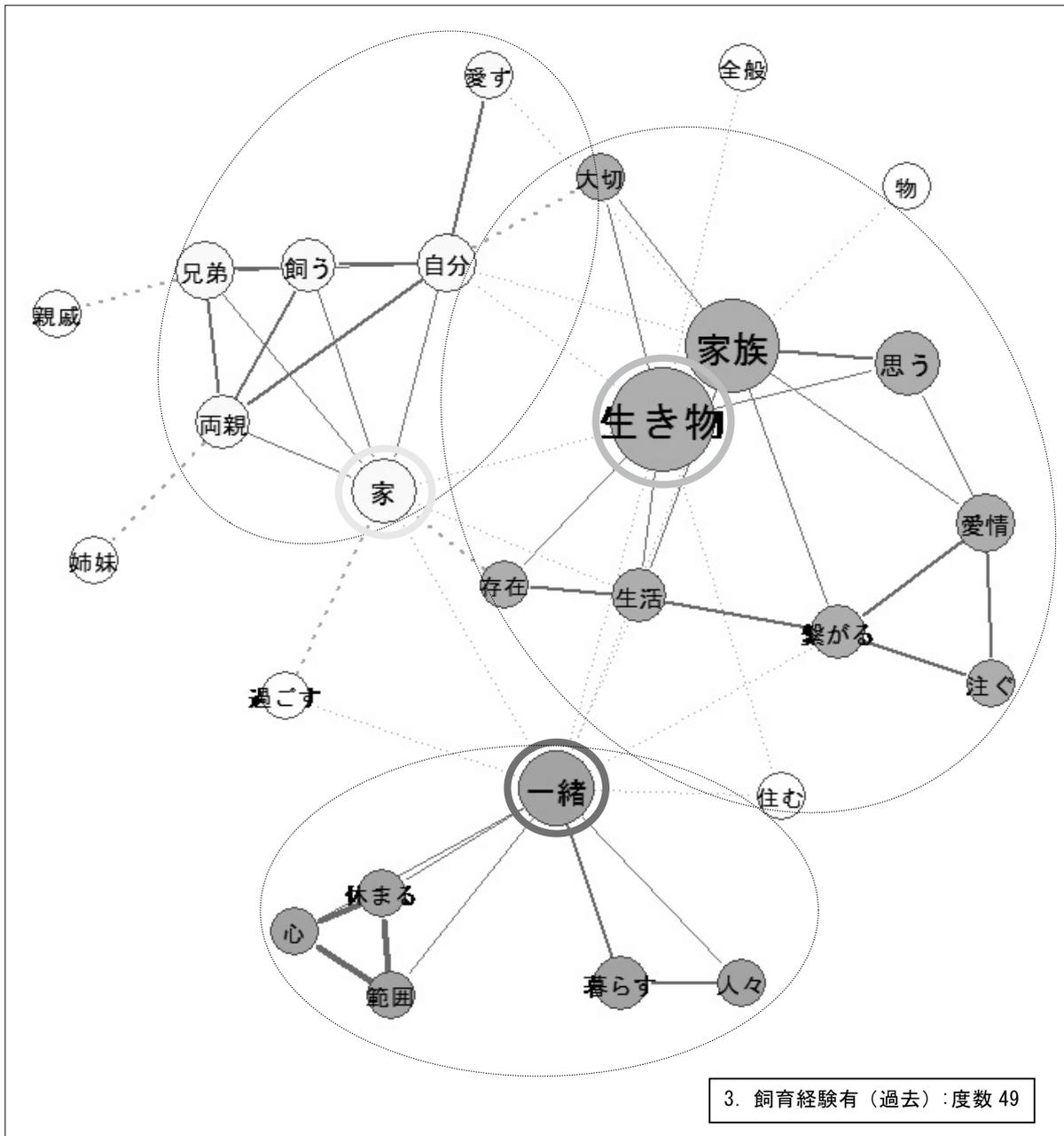


図5 飼育経験有（過去）が「家族とみなす範囲」の共起ネットワーク分析

図5では「一緒」「生き物」「家」の順で中心性が高く、語と語のつながりの中心である。サブグループは3つに分かれた。愛情で繋がった生き物も家族であり、一緒に暮らし心休まる範囲、が家族とみなされている。犬や猫、またはペットという具体物を想定するというよりは、それらを総称した生き物という概念でとらえている。

Q26：飼育経験有（現在・別居）の結果

図6はQ26の回答で飼育経験有（現在・別居）、と回答した共起ネットワーク分析の結果である（出現回数2回以上）

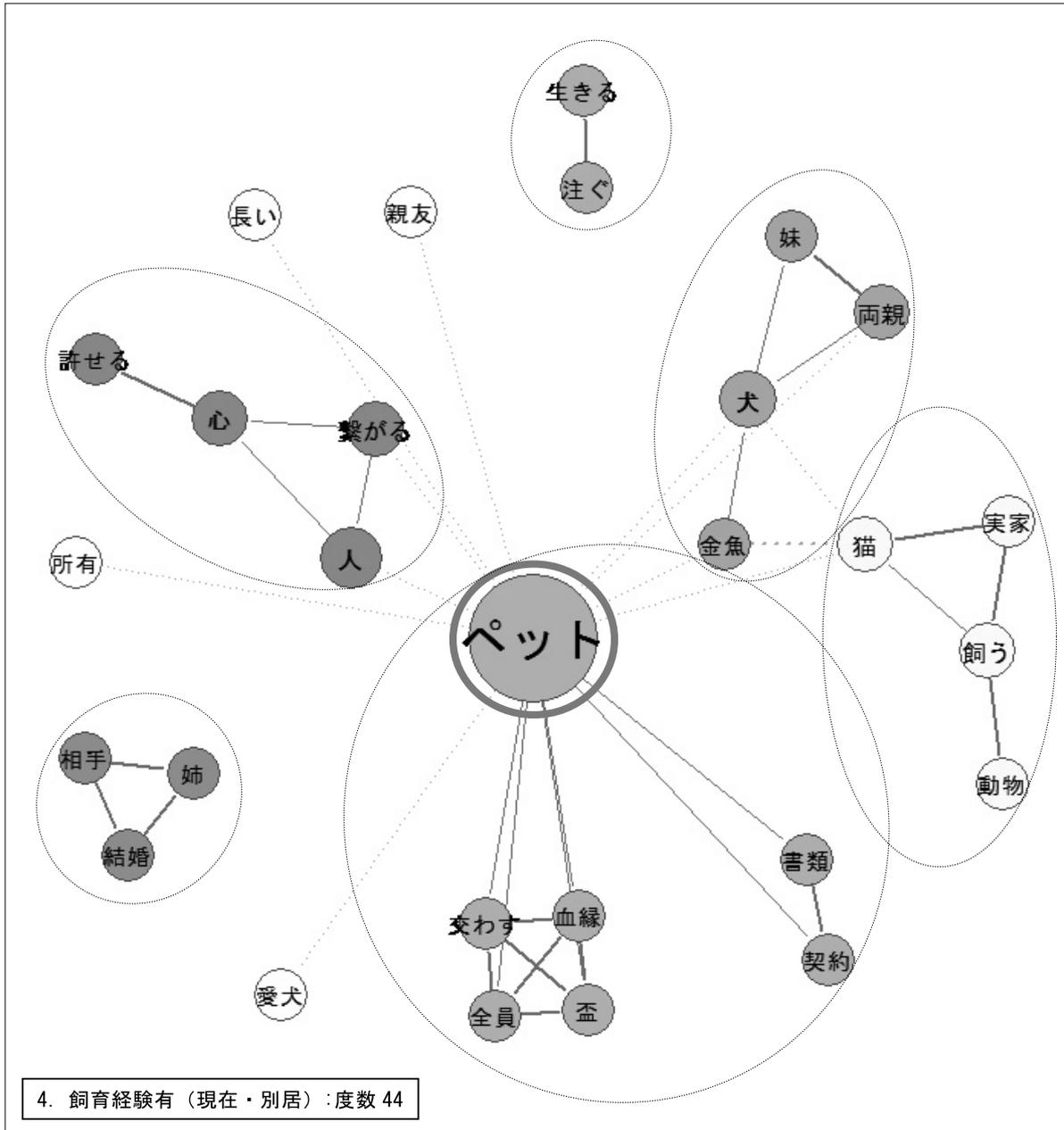


図6 飼育経験有（現在・別居）が「家族とみなす範囲」の共起ネットワーク分析

図6では「ペット」のみが著しく中心性が高く、語と語のつながりの中心である。サブグループは6つに分かれた。円が大きいことから、ペットは中心性も高いが、語の頻度も高い特徴語である。家族を想起した場合、現在は別居である犬、猫、ペットなどの語が中心となって表れている。離れて暮らしているペットが顕在化され家族とみなされていることがわかる。

Q28：飼育経験有無4分類全体の結果

図7はQ28の回答を飼育経験有無の4つに分けて共起ネットワーク分析の結果である（出現回数2回以上）。

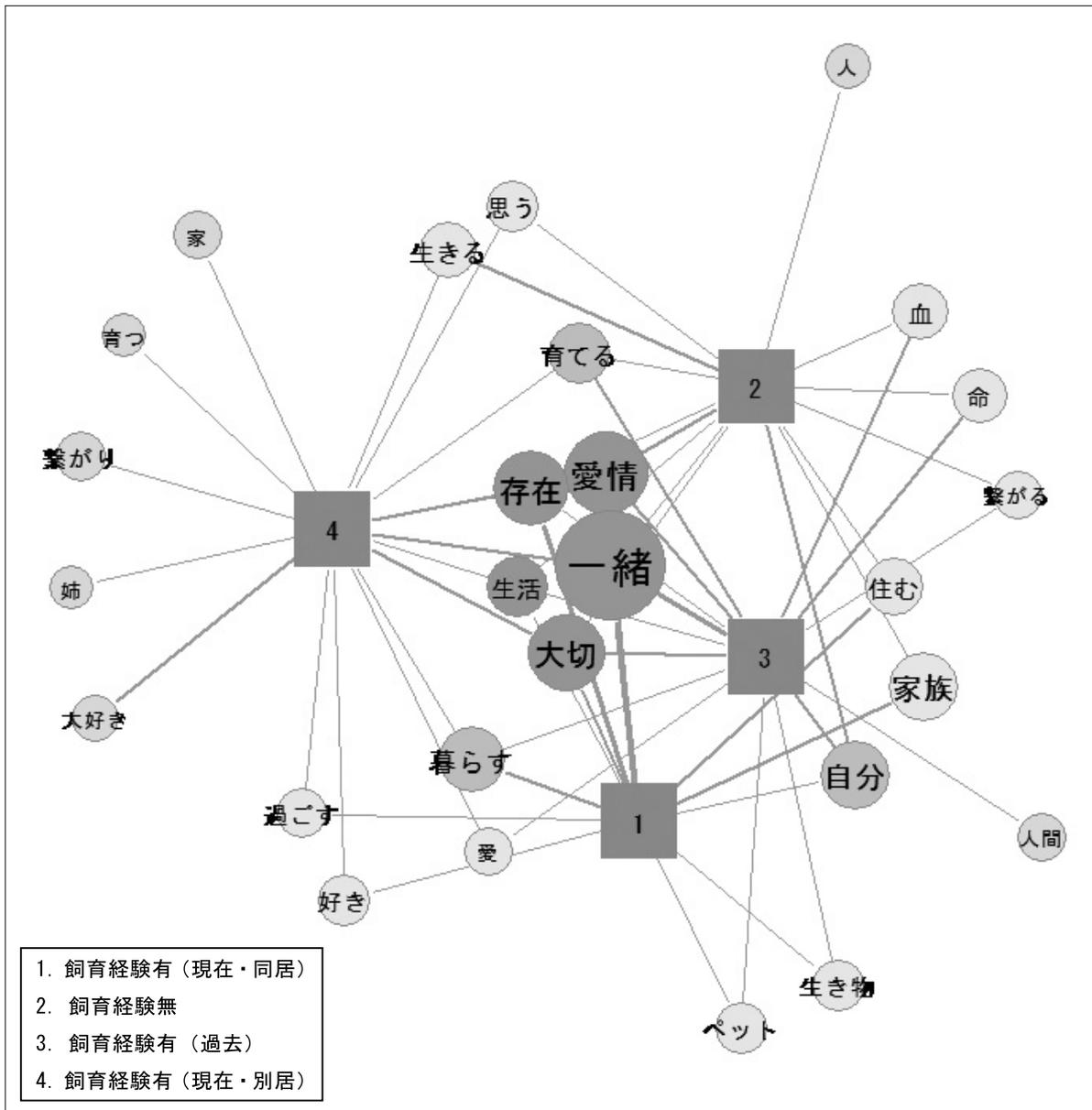


図7 4分類別でみた「なぜ家族とみなすのか」頻出語の共起ネットワーク分析

図7の結果から、1. 飼育経験有（現在・同居）は「一緒」「愛情」「存在」「大切」、2. 飼育経験無は「愛情」「生きる」、3. 飼育経験有（過去）は「一緒」「愛情」「育てる」、4. 飼育経験有（現在・別居）「存在」「大好き」「大切」などに太い線が描かれている。1. 飼育経験有（現在・同居）、3. 飼育経験有（過去）および4. 飼育経験有（現在・別居）は比較的同じ言葉で繋がれており、それらと比べ、2. 飼育経験無は若干違う様相がわかる。

Q28：飼育経験有（現在・同居）の結果

図8はQ28の回答で1. 飼育経験有（現在・同居）、と回答した共起ネットワーク分析：サブグラフ（媒介）の結果である（出現回数2回以上）。

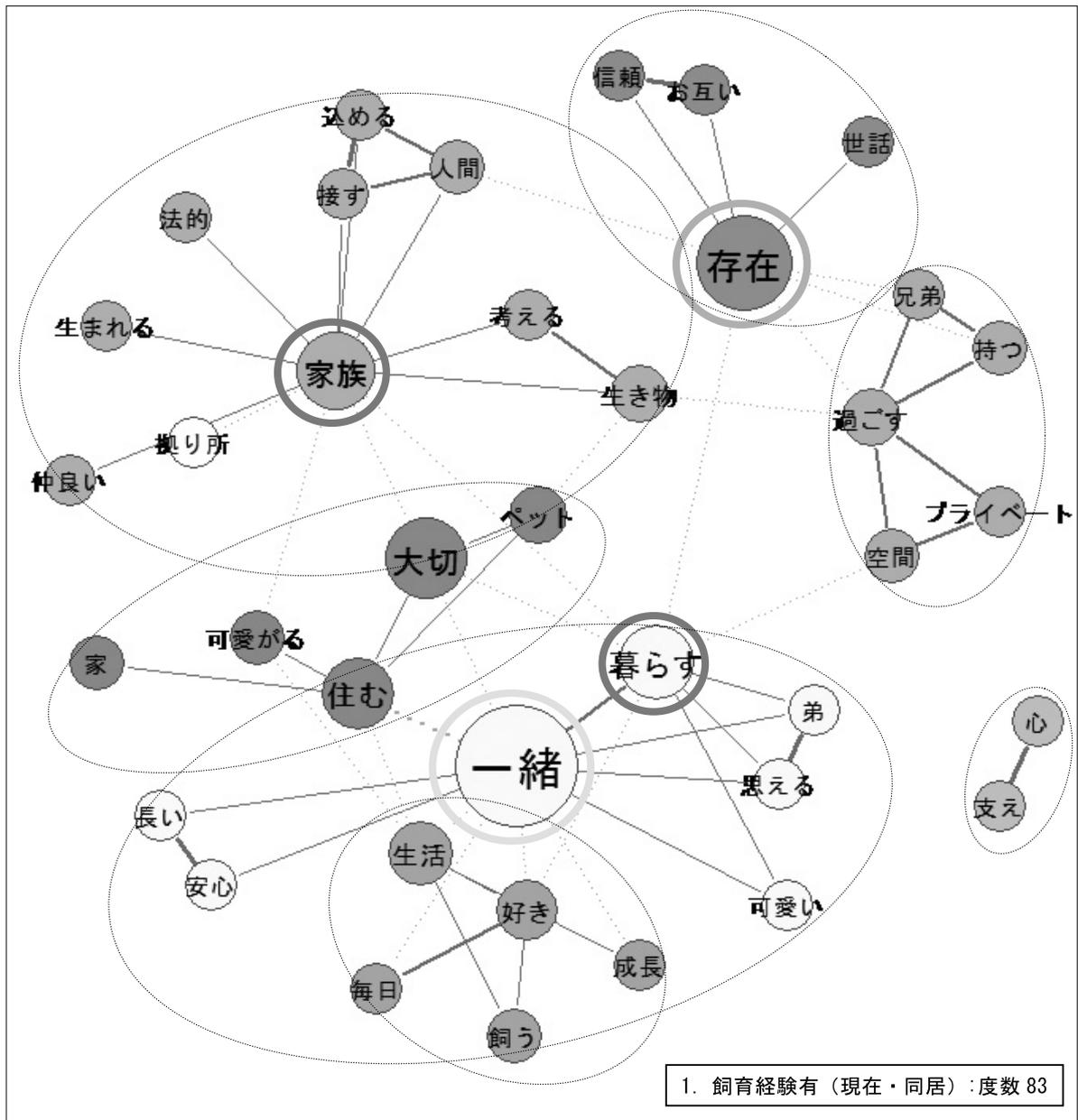


図8 飼育経験有（現在・同居）が「なぜ家族とみなすのか」の共起ネットワーク分析

図8では「家族」「存在」「暮らす」「一緒」の順で中心性が高く、語と語のつながりの中心である。サブグループは7つに分かれた。信頼できる関係である、仲が良いから家族、一緒に暮らしているから、大切に可愛がり住んでいるから、など感情豊かな語が並んでいる。

Q28：飼育経験無の結果

図9はQ28の回答で2. 飼育経験無、と回答した共起ネットワーク分析：サブグラフ（媒介）の結果である（出現回数2回以上）。

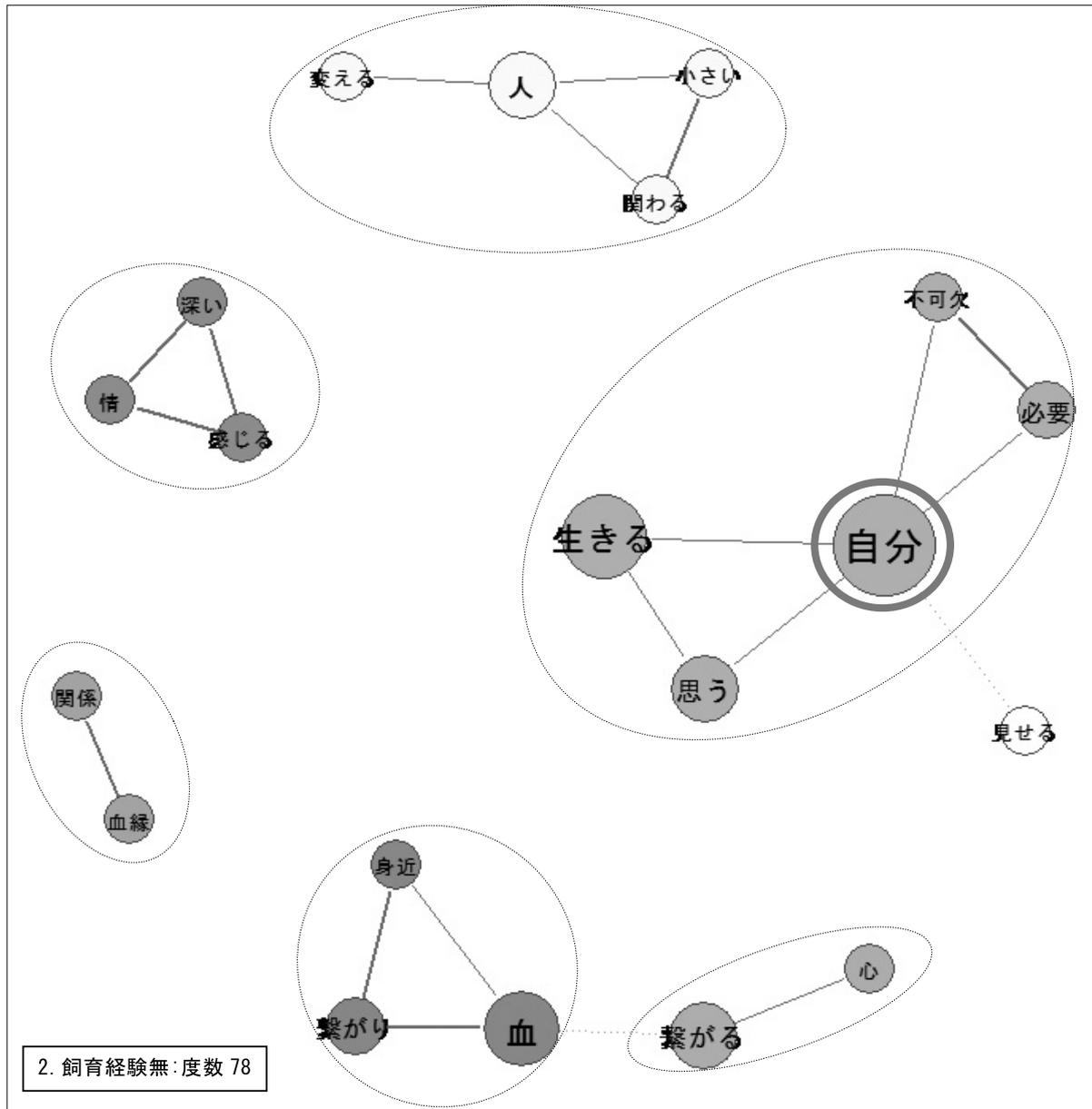


図9 飼育経験無が「なぜ家族とみなすのか」の共起ネットワーク分析

図9では「自分」の1語のみが中心性が高く、語と語の繋がりを中心である。サブグループは6つに分かれた。自分個人が必要不可欠と思う、血の繋がり、血縁関係、など他の3分類に比べ、単純な語で表現されている。

Q28：飼育経験有（過去）の結果

図10はQ28の回答で3. 飼育経験有（過去）、と回答した共起ネットワーク分析:サブグラフ（媒介）の結果である（出現回数2回以上）。

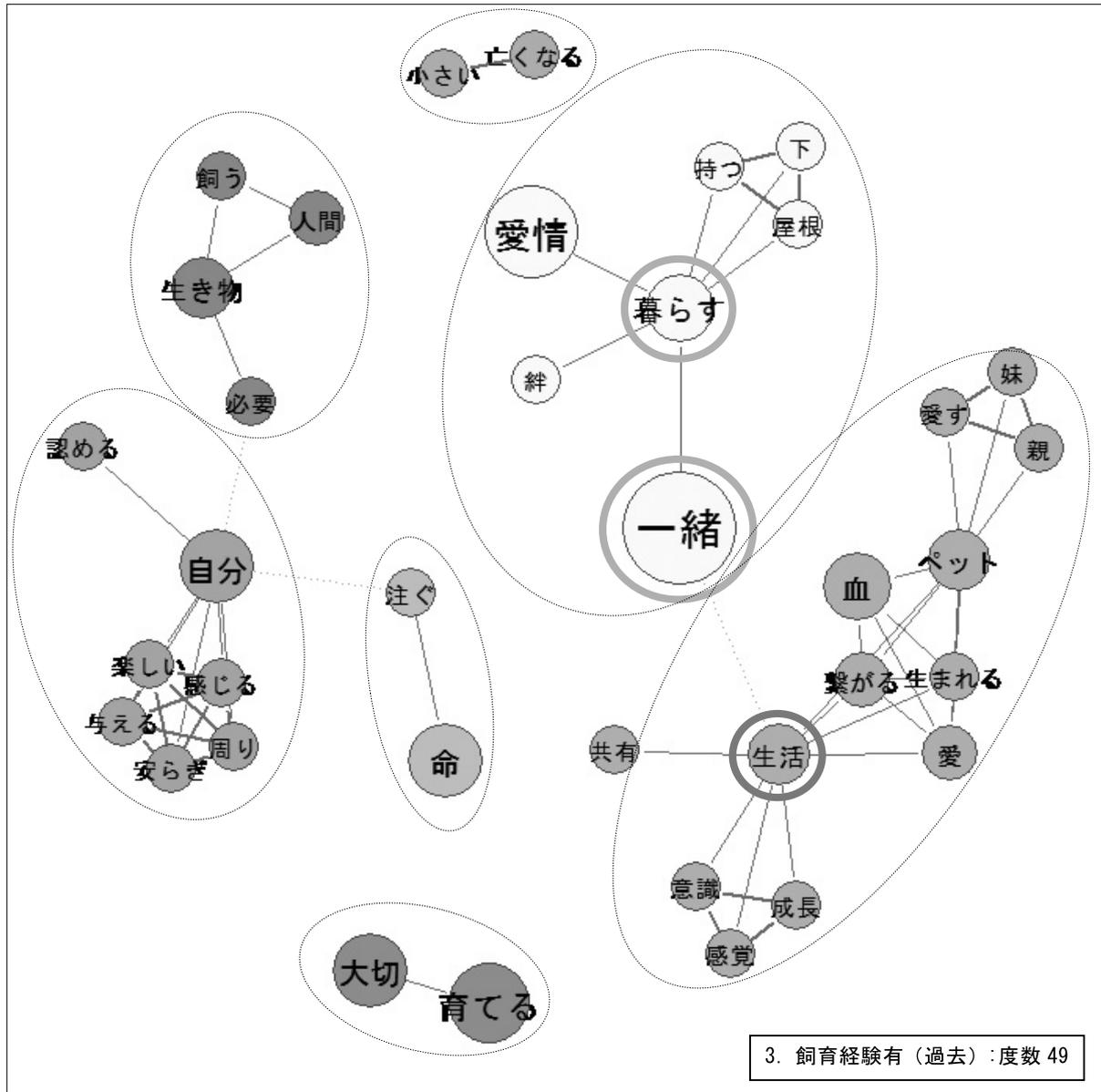


図10 飼育経験有（過去）が「なぜ家族とみなすのか」の共起ネットワーク分析

図10では「家族」「存在」「暮らす」「一緒」の順で中心性が高く、語と語の繋がりを中心である。サブグループは7つに分かれた。ペットや親兄弟、愛などで繋がる生活、愛情をもって一緒に暮らしているから、安らぎや楽しさを感じるから、大切に育ててきた、など感情を表す語が多く見られ多様に表現している。

Q28：飼育経験有（現在・別居）の結果

図11はQ28の回答で4. 飼育経験有（現在・別居）、と回答した共起ネットワーク分析：サブグラフ（媒介）の結果である（出現回数2回以上）。

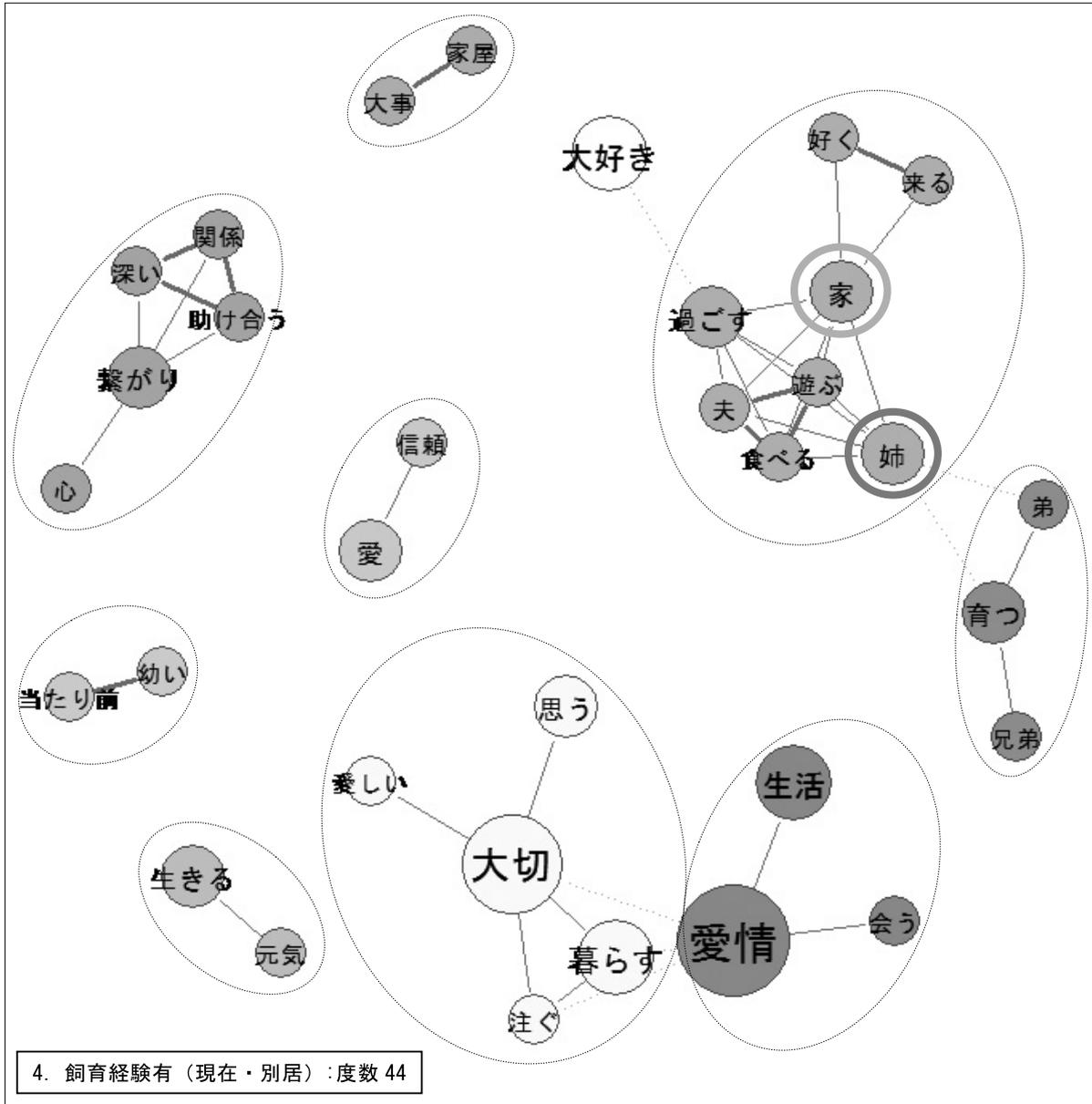


図11 飼育経験有（現在・別居）が「なぜ家族とみなすのか」の共起ネットワーク分析

図11では「姉」「家」の順で中心性が高く、語と語の繋がりを中心とする。サブグループは9つに分かれた。深い関係で繋がり助け合う、愛情のある生活だから、愛や信頼、愛しく大切に思い暮らしている、など肯定的な語で表現している。

ペット家族意識因子分析の結果

前回の研究結果（松田、2016）を受け、飼育経験有無の影響を検討するため、ペット家族意識について再度因子分析を行った。まず質問16項目の平均値、標準偏差を算出し、天井効果及びフロア効果は見られなかったため、全ての項目を採用した。

次に逆転項目である、Q31・Q33・Q34・Q36・Q39・Q40・Q42・Q43に関して逆転処理をし、全16項目を因子分析した。固有値の変化から3因子構造が妥当であると考え、再度主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。バリマックス回転後の最終的な因子分析結果を表1に示す。なお回転前の3因子で16項目の全分散を説明する割合は60.04%であった。

第1因子は6項目で構成されており、「言葉が通じない」「人間の方が大事」「人とペットは違う」「法的に問題がある」など、ペットを家族とみなすには、人との違いが大きいといった内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「隔たり」因子と命名した。

第2因子は8項目で構成されており、「愛着がわく」「心の支え」「かわいい」「人の代りになる」「無条件に愛する存在」「当然家族」「責任がある」など、ペットとは情緒的な側面を多く含んだ家族であるといった内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「傾倒」因子と命名した。

第3因子は2項目で構成されており、「人間の都合である」「考え方に違和感がある」など、そもそもペットを家族とすることには賛同しない内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「異論」因子と命名した（表1）。

表1 ペット家族意識の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

		1	2	3	共通性
Q42逆	ペットとは言葉が通じない存在	0.85	0.23	-0.05	0.77
Q43逆	人間の方が大事	0.79	0.23	0.02	0.68
Q36逆	ペットと人間は種が違う存在	0.77	0.29	-0.01	0.68
Q40逆	ペットと家族は別	0.64	0.30	-0.07	0.51
Q39逆	ペットには思い入れがない	0.57	0.21	-0.04	0.38
Q34逆	ペットは家族だという考えは法的に違反	0.48	0.10	-0.07	0.24
Q32	ペットは飼っていると愛着がわいてくる	0.28	0.77	-0.05	0.67
Q30	ペットは心の支えになる	0.39	0.67	0.02	0.61
Q44	ペットはかわいい	0.09	0.63	0.04	0.40
Q29	ペットは人間の代わりになる	0.14	0.60	-0.02	0.38
Q41	ペットは無条件に愛情を注げる対象	0.35	0.60	0.00	0.48
Q38	ペットを家族だと思うのは当然	0.41	0.53	0.02	0.45
Q35	飼えば生き物の面倒をみる責任がある	0.10	0.49	0.08	0.25
Q37	ペットを家族だと思えば家族	0.15	0.38	-0.01	0.17
Q31逆	ペットが家族であるという考えは人間の都合	-0.08	0.04	0.99	0.99
Q32逆	ペットは家族だという考えに違和感	-0.07	0.04	0.99	0.99
	因子寄与	3.50	3.15	1.99	8.64
	累積寄与率	21.86	41.51	53.97	

ペットを家族として考える場合には、動物と人といった種の違いによる隔たり、無条件に家族と考える傾倒、ペット家族の考えにもとより否定的な異論、といった要因を孕んでいる。

ペット家族意識尺度の下位尺度間の関連

ペット家族意識尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「隔たり」下位尺度得点（平均1.69、SD0.69）、「傾倒」下位尺度得点（平均1.81、SD0.64）、「異論」下位尺度得点（平均1.90、SD0.91）とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、隔たりで $\alpha = .86$ 、傾倒で $\alpha = .83$ 、異論で $\alpha = .99$ 、と十分な値が得られた。

ペット家族意識尺度の下位尺度間相関を表2に示す。3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示

した (表2)。

表2 ペット家族意識尺度の下位尺度間相関と平均、SD

	隔たり	傾倒	異論	平均	SD
隔たり	-	.549**	.730**	1.69	0.69
傾倒		-	.523**	1.81	0.64
異論			-	1.90	0.91

**p<.01

飼育経験別の検討

ペット飼育経験の有無による差の検討を行うために、ペット家族意識尺度の下位尺度得点を算出しt検定を行った。その結果、隔たり下位尺度 (t (250) =4.52, p<.001)、傾倒下位尺度 (t (251) =-2.49, p<.05)、異論下位尺度 (t (251) =4.13, p<.001)、について飼育経験有よりも飼育経験無の方が有意に高い得点を示していた (表3)。従って、ペット家族意識に関しては、飼育経験無は、飼育経験有に比べて、「隔たり」「傾倒」「異論」の意識が高いことが分かった。

表3 飼育経験別の平均値とSDおよびt検定の結果

	飼育経験有		飼育経験無		t値
	平均	SD	平均	SD	
隔たり	1.56	0.06	1.97	0.78	4.52***
傾倒	1.74	0.60	1.95	0.68	2.39*
異論	1.74	0.83	2.23	0.96	4.13***

*p<.05 ***p<.001

考察

前著において家族とみとめる際に必要なもの、それは愛情や互助の関係にある精神的な絆と、現代社会で重要視されている血縁や経済的側面などの物質的な繋がりであった。家族であることは、血縁関係であることのみならず、情緒的な関係であることが必要とされていることが分かった (松田, 2016)。本研究はその続編であるが、ペット飼育経験有無の側面に焦点を当て、質的に分析した。

自由記述「家族とみなす範囲」からは、ペット飼育経験者において「ペット」「生き物」「一緒」といった語に中心性が高く、飼育経験無の者に関しては「自分」に中心性が高いといった結果であった。「家族とみなす範囲」と問われたときに、飼育経験の無い者は自分を中心とした血縁関係で結ばれた伝統的な家族を思い浮かべ、ペット飼育経験者は自分以外の愛情をもって一緒に暮らす生命を家族として顕在化させるのが、その特徴であろう。共起ネットワークにおいて中心性が高いということは、その語がデータ中で重要な役割を果たしている可能性があるということである。感覚的に解釈する部分も否めないが、データを理解するための一つの解釈になることには間違いない。家族を考える際に、自分中心の「個」からみるか、自分を取り巻く「周辺」から見るのか。興味深い結果が得られた。

また「なぜ家族とみなすのか」の問いには、飼育経験の無い者と比較して、飼育経験者は愛情を中心としたポジティブな情緒的側面を多く表現していた。サブグループ抽出によるグルーピングから、飼育経験者において、豊かな表現で家族とみなす理由を記述していることが分かる。これらのことから、家庭の中にペットという媒介物が存在するということが、家族の絆をより強く結び付け、感情面でもポジティブな効果を生むことが推測される。そして「家族」を想起した場合、多様な感情表現を用いている。これらのことから、大人のみならず子どもにおいても家庭内のペットの存在というものが、思いやりや他者への配慮といった豊かな感受性を育むことが予測される。またそのことにより自らの「家族」という概念をより一層強く持つことにも繋がるであろう。

ペット家族意識について飼育経験の有無から再分析を行った結果、ペットは家族である、と言い切るには複雑な要因を孕んでいることが分かった。予測ではペット飼育経験者において多くの人が盲目的にペットは家族と言い切ることを想定していたが、結果は飼育経験の有る者より無い者において、「隔たり」「傾倒」「異論」全ての意識が高いことが分かった。「隔たり」「異論」においてはペット家族に対して否定的であることは容易に推測できる。「傾倒」に関しては、ペットを飼ったことがない人の方が、ペットのかわいらしさ、癒し、といった表面的なことからポジティブなイメージを持ち、「傾倒」要因に大きく関わるのではないかと解釈される。

現代ではペットの方が家族としてふさわしいと考える人が少なからず存在し（山田, 2014）、このことが意味するものは、家族と思える条件として、経済的・制度的な側面よりも愛情や情緒的交流を持てるものの方が家族らしく感じられてしまう、ということである。その意味では、家族を家族らしい存在として捉え直す際に、ペットという媒介物を一つの手段とし、家族関係を進展させる必要性に迫られているのが現代の家族の特徴ではないだろうか。

ペットとの適切な生活は、家族成員間の絆を強め、コミュニケーション効果を高める。精神的にも安心感、自己肯定感を満たされるといった効果があり、元気や活力が得られる。第二の家族としてのペットの存在は、十分に有益な効果を私たちにもたらすであろう。

参考文献

- 石原邦夫（2000）家族と生活ストレス、放送大学振興会。
- 金子智栄子・村上綾（2003）ペットが及ぼす心理的效果—飼育経験の有無による検討—、文京学院研究紀要Vol.5、No.1、pp85-93。
- 松田光恵（2007）ペット意識に関する調査～ペットブームを支えるヒトの意識とは何か～、日本社会心理学会 第48回大会 ポスター発表 日本社会心理学会第48回大会論文集、pp754-755。
- 松田光恵・石山玲子（2009）ペットの存在に関する一考察 —ペット尺度再分析—、日本社会心理学会第50回大会日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会 ポスター発表、合同大会発表論文集、pp372-373。
- 松田光恵・川上善郎（2008）ペット意識尺度の再検討の試み—ペットブームを支えるペット意識の構造—、『コミュニケーション紀要』成城大学大学院 第20輯、pp.77-98。
- 松田光恵（2016）ペットは家族とみなせるか（1）—家族概念と主観的家族についての検討—、くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要、第49巻第1号、pp51-62。
- 内閣大臣官房政府広報室（2003）動物愛護に関する世論調査、<http://survey.gov-online.go.jp/h15/h15-doubutu/2-1.html>
- 内閣大臣官房政府広報室（2010）動物愛護に関する世論調査、<http://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-doubutu/index.html>
- 田中京子（2013）KH CoderとRを用いたネットワーク分析、久留米大学コンピュータジャーナル、VOL.28、pp37-52。
- ペットフード協会 監修（2014）笑顔あふれるペットとの幸せな暮らし、ペットとの共生推進協議会。
- 若島孔文（2007）犬と家族に心理学—ドッグ・セラピー入門—、北樹出版。
- 若島孔文（2011）家族関係に及ぼす犬の影響について、心理学ワールド、pp23-24。
- 山田昌弘（2014）ペットは家族なのか、マグナカルタ Vol.6 SUMMER、ヴィレッジブックス、pp152-165。

注

注1）KH Coder: テキストマイニングのためのソフトウェア。新聞記事や、質問紙調査における自由記述項目などによって得られる様々な日本語テキストデータを分析するソフト。